

ようなわけにはいかないが先任の先生方の御力で必要最低限のものは有った。それにもかかわらずこの町の暮らしには一点の大きな不満が有る。それは文化の層の薄さである。私の生まれ育った茨城もその点でここといい勝負だった。しかし乗り物にゆられて東京へ出さずればよかった。好きなオペラや展覧会、所謂名画座、もっと小ぶりには東宮御所近くのドイツ文化センターで年2回程集中して開かれたドイツ映画やオペラ・フィルムの上映週間、常打ちの寄席、こうした多くの催しに通えた学生時代は実に楽しかった。人ごみ、渋滞と、そこに住みたいと思ったことは一度もなかったが、少くとも文化面では東京は宝の山で、大阪ですらその意味では数等下、況や高松に於てをや。(今春の入試で京大から東大へ人が流れて大騒ぎだったようだが、これなど東大が好かれたというより東京が好かれたためと思うがどうかしら。東大と京大がスタッフ・予算等そのまま場所だけ交換したら今年と逆の結果になるのではない

だろう) 勿論讃岐土着の文化は有るし、音楽にしてもアマチュアの多くの団体が活動している。多くの人がプライベートに演奏に参加したりするのは文化の重要な一面だし私自身も好きだ。しかし、それらは所詮一流のものに接することの代替にはなりえない。

実のところ文化への飢えは日々増している。文科の教師・研究者としては、この飢餓感はいつまでもはっきりと感じるようでありたい。この点だけは香川に同化し慣れてはいけないと戒めたい。そうしてこの飢餓感を事あるごとに学生に吹聴したいと思っている。仄聞するに香川大の学生の多くは近県出身者だそうである。だから彼らは当初からこうした深刻な飢餓感を感じないでいるのかもしれない。例えば国語や社会、芸術の先生はとどのつまり文化を伝える仕事だ。こうした飢餓感すら感じない学生がそのまま卒業してそうした職につくというのは考えてみればこれほど恐い事はないと思うからである。

留学生随想 その1

友 沢 昭 江

私の生まれ育った町、神戸は人口ひとりあたりの割合で見れば、外国人の数ではおそらく日本でも一、二になるだろうと思われる。しかし、普通の神戸人(「神戸っ子」という洒落たことばがあるが、これはさしずめ北野町辺りに住んで、子供をインターナショナルスクールにでも通わせて喜んでいるような人にしか当たらないと思うのだ

が)には、近くの華僑の散髪屋さんとか焼肉屋の朴さんとといった日本人と全く変わらない人たちとの接触を除けば、外国人は遠い存在なのである。

ところが、私が入学した大学には、毎年三百名以上の外国人が留学生として日本語を学びに来ており、彼らと何でもおもしろそうな事をしてやろうという学生のクラブ

があった。ここでの活動を通して、ユニークな、そして心に残る留学生と知り合うことになり、ひいては後に日本語を教えるきっかけにもなったのである。なにか短いエッセイでも、と言われなければ、おそらくじっくりと想い出すこともなかったであろう外国の友人たちのことを少し述べてみようと思う。

大学に来ている留学生はみな文部省の奨学金を受けている学生で、日本語を半年間学んだ後、全国の大学に振り分けられ、各自の専門分野の研究に携わることになっている。

この最初の六ヶ月間の研修期間中は出身国も専門もバラバラの外国人がせまいキャンパスにうようよし、さながらミニオリンピックの様相を呈する。これだけの数が集まれば、中にはちょっと変わったのや、ユニークなものも当然出てくる。万年「平和」の「単一民族」国家の日本にどっぷりつかっていても、ちょっと聞けないような話も耳にする。

今回は、今の日本人にとっては最も現実感の薄い「戦争」という現実をまざまざと感じさせた一人の留学生のことを書いてみようと思う。

ベトナムの留学生のホンさんに初めてあったのは、1974年、大阪の千里にある留学生寮のクリスマスパーティーでだった。そのとき彼はすでに博士課程の三年で、専門の電気工学の研究もあとは論文を仕上げるのみだった。彼の日本語はかすかに「なまって」はいるものの、およそ完璧に近いものだった。アメリカやヨーロッパの学生が底抜けに楽しんでいるのを、すこし離れてワインを飲みながらながめているその視線は、優しいというより、淋しげであった。長髪に口髭をはやし、黒の上下に細身の体

をつつんだ彼は、アジアのインテリ青年の名にふさわしい人に見えた。その頃のベトナムからの留学生はみな当時の南ベトナムからで、彼も、サイゴンの出身で、これもまたエリート例に違わず、英語とフランス語を話し、戦下にある祖国や、家族のことを常に心に懸けていた。彼によると、両親はサイゴンで商売を営んでおり、妹が何人かいて、彼は長男で、一家の「期待の星」のような存在であり、その自分が研究のためとはいえ、故国を離れているのは何とも心もとない。ひんばんに手紙を書くのだが、日数もかかるし、出したものもすべて届いているとは思えず、向こうからの返事も、忘れたところにやっと来るということであった。博士号をとれば一刻も早くベトナムに帰りたいとは思っているものの、その時点での情勢によっては、せっかくの日本での努力の成果も役立てることができなくなるかもしれない、毎日をやりきれない思いで過ごしていたのだった。

新しい年1975年が明けて、彼の出す手紙に対する返事は全く来なくなりました。そのことの意味を彼は、最悪の事態が起こっているのだと解釈したようだった。その年の4月に彼は念願の博士号を取り、彼の故郷サイゴンは陥落、北ベトナム軍により「解放」された。この時、国外にいたベトナム人留学生の中には帰国を諦めた者も多くいたが、ホンさんは決めあぐねていた。第一、故国のために自分の知識や技術を役立てたいとは思っても、それはあくまでも愛する家族や友人や慣れ親しんだ町や風景があつてのこと。その家族の安否も確認できない所へとびこむのは、かなりの勇気のいることであった。

しばらく彼と会うこともなく数ヶ月が過ぎ、私は大学三年の夏休みをフランス語の

「勉強」のためにパリで過ごすことにした。凱旋門からほど近いアパルトマンの一室に下宿し、語学学校に通ったのだが、夏の日の長いパリのこと、夕食後、同じ下宿のスイス人の女の子いつものように散歩にかけた。見知らぬ通りを歩くのはワクワクすることだが、パリという街はそんな好奇心を決して裏切らない。その日はミーハー的に凱旋門の下をくぐりぬけて、シャンゼリゼへ行こうということになった。薄暗い地下道で向こうから近づいてくる人影をみたとき、思わず大声をあげた。

「ホンさん、何してるのん、こんな所で！」

「あなたこそ、なんで・・・」と、まるで梅田の地下街で出会ったようなやりとりに二人とも大笑いをした。

彼の話によると、家族の安否は相変わらず不明のまま、新生ベトナムの体制には自分の考え方は受け入れられないだろうとの思いもあって、結局帰国を断念し、技術を持つ者を優先して受け入れてくれるカナダへ移住することにした、というのだ。そして、祖国に帰れないのならその前に、友人や親戚の多くいるフランスヘセンチメンタルジャーニーを、と考えたのだった。

「日本にそのままいたら？」と聞くと「日本には、僕の業績を認めて、働く場を与えてくれる所があると思う？」と反対に問わ

れる始末。その後、日本もベトナムからの難民を不承不精受け入れ、対応に四苦八苦することになるろうとは思ってもよらなかった頃のことである。

解放後数年たって80年代に入ると、統一ベトナムからの留学生がやってくるようになったが、彼らとホンさんの間にはかなりの違いがあるように思われた。専攻が理科系に多いのは相変わらずだが、ロシア語を話す人が多く、服装もどちらかという土地味で、少し野暮ったいような感じだった。祖国の建設のために学ぼうという真摯な態度には変わらないのだが、意気込みがストレートで、解放前の、特にサイゴンのような大都会出身者にみられた少し斜に構えたアンニュイな雰囲気を持ち、音楽や文学などの専門外のことに関する知識も豊富に備えた人は少なくなったような気がした。

ホンさんがカナダへ移住した後のことは一切分からない。アメリカよりも移民の受け入れに対する配慮の細かい国であるから、彼のような専門技術の持ち主はおそらく「平等の機会」を十二分に活かしていることだろう。しかし、今でも、一家でベトナムを脱出し、大海を小舟で漂流するボートピープルのニュースを聞くと、たった一人でカナダへ行ってしまったもう一人の「難民」のことを思わずにはいられないのである。